「子どもの教育」と「高齢者の福祉」の間

淑徳大学教授・東京大学名誉教授　吉田 章宏

「井の中の蛙　大海を知らず，されど井の中を知る。大海の巨鯨　大海を知る，されど井の中を知らず」（吉田章宏作）。物事にはすべて，表裏一体を成す利害，得失と長短などがある，というわけです。ところで，今日の日本では，「少子化社会」と「高齢化社会」が口癖のように喧伝されています。どちらもが社会に難問を提起している，という消極的な含意で語られる場合が多いようです。しかし，物事の利害得失長短は表裏一体です。消極的な表面には積極的な裏面が必ず隠されているものです。そこで，「少子化社会」と「高齢化社会」の消極面をひっくり返してその積極面を見るべく，「子どもの教育」と「高齢者の福祉」の間について考える小道を，ごいっしょに歩んでみたい，と思います。そう聞いて，「そうだ，両者の間には深い結びつきがあり，それには積極的な意味がある」と直ちに直観し確信していただけたでしょうか。それとも，「そもそも，その間にいったいどんな繋がりがあるのだ。それに，繋げてみても何も積極的なことは出てこないではないか」と怪訝にお思いになったでしょうか。確信した方々には，積極面をさらにていねいに見ることへと，怪訝にお思いになった方々には，積極面に気づき，さらに確信することへと，お誘いしたく思います。

「子どもの教育」といえば，子どもを「教え育てる」ことだと，つい思いがちです。そして，「高齢者の福祉」といえば，費用のかさむ「福祉サービス」を高齢者に提供することだ，などと思い込みがちです。確かに，限定された意味では，そのとおりかもしれません。しかし，「子どもの教育」とは，子どもの生きる狭い世界から子どもを「導き出し」，より広い世界へと「導き入れる」ことだというのが，むしろ，より本質的な理解です。諺の「かわいい子には旅をさせよ」とは，このことを的確に表現しています。教師の仕事とは，子どもたちのそうした世界の移行に寄り添って，いっしょに，旧い世界から新しい世界へと共に歩み「共に育つ」ことなのです（吉田章宏『ゆりかごに学ぶ　教育の方法』一茎書房）。蘆田恵之助の遺訓「共に育ちましょう」はこの本質を浮き彫りにする尊い言葉です。

また，「高齢者の福祉」とは，その本質は，高齢者たちに幸せ（福祉）をもたらすことではないでしょうか。そう考えると，高齢者の福祉における中心には，高齢者が「生きがい」（神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房）をもって，残された貴重な年月を充実させて生き生きと生きることを可能にし，実現することが置かれるべきでないでしょうか。

そのように「子どもの教育」と「高齢者の福祉」のそれぞれを考えてみると，ここに，一つの新しい展望が開かれてきます。それは，子どもと高齢者とのそれぞれが，より豊かに生きる「共に生きる」機会を計画し，実現することです。子どもたちと高齢者たちが，共に生きる「出会い」の機会をもつことにより，子どもも高齢者も，人間として生き生きと「共に育つ」ことになるでしょう。

高齢者には，若く元気な教師にはない豊かな人生経験があります。若い教師には想像す

ることさえ難しい，多様な世界を生きてきた長い歴史があります。子どもたちは，時には，そうした高齢者たちに導かれることにより，日常生活では知ることのできない世界へと導き入れられることが可能となります。例えば，長い人生の社会生活における成功と失敗，歓喜と悲嘆，希望と絶望，理想と現実，失望と幻滅，真実と虚偽，表と裏，健康と病気，戦争と平和，などなどの体験の歴史です。それは，豊かな実体験のある高齢者だけが，子どもたちを導き入れることのできる世界です。高齢者の生きてきた世界に学ぶことを通して，子どもたちは実人生と人間世界の多面性，複雑性，深さと豊かさを学びます。「ピンポーン！」の音とか「当たり！」の声ですべてすまされかねない浅薄で皮相なテレビ文化の世界を超えて，豊かな人間世界の可能性を垣間見て，深く考え，視野を広げ，遠い将来へと思いを馳せることへと誘われて行くことになるでしょう。また，子どもたちは高齢者のお世話をお手伝いすることでも，人間としての喜びを自覚します。他者である高齢者のお役に立つ経験は，子どもたちの社会的成熟を促します。そうして，子どもたちは，今日の子どもとして，新しい人間的な世界へと「育つ」ことが可能となるでしょう。

しかし，そうした出会いで「育つ」のは，決して，子どもたちだけではありません。高齢者も高齢者として「育つ」のです。高齢者が若かったころに生きた社会とはあまりにも異なってしまった今日の社会で，「生きがい」さえも見失ってしまい，時間を持て余し，ゲートボールにわずかにその「生きがい」を捜し求める高齢者にとって，子どもと「共に育つ」出会いを通して，社会の将来を担う子どもたちの喜びの姿が，高齢者たちの深い「生きがい」となることが可能となるでしょう。また，高齢者たちは，子どもたちと「共に育つ」ことにより，子どもを新しい世界へと導き入れる導き手となることで，ふと気がついてみると，いつの間にか自らの「若返り」が促されていた，ということにもなるでしょう。子どもたちは，巧まずして，高齢者に「若さ」を贈ることができるのです。高齢者は，子どもといっしょならば，高齢者としての見栄も体裁もかなぐり捨てて，幼少時代に帰って無邪気に遊ぶことができる，といいます（吉田章宏『子どもと出会う』岩波書店1996，101：エリクソン『老年期』みすず書房1990，195）。人生の豊かな享受が可能となるのです。

父親が老いた祖父を粗末に扱い棺桶をあらかじめ用意する。それをじっと見ていた息子は，棺桶をもう一つ用意する。父親は，「それは何のためだ」と聞く。子は答える。「父さん。あんたが入るためのものだよ」と。まさに，「子ども叱るな来た道じゃ。年寄り嘲うな行く道じゃ」ですね。

人間社会では，世代から世代への継承が行われます（西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会）。日本では，たとえ親世代から子世代への継承はかろうじて行われているとしても，長年の「核家族化」によって，祖父母世代から孫世代への充実した継承は，きわめて困難となりました。そのことはよいことばかりでなく，子どもたちにも，祖父母たちにも，そして，社会全体にとっても，悪いことをももたらしました。視野が狭まり，短期的な目先のことばかりしか考えない人間が増え，そして，社会全体も「近視眼的」となった，ということもその一つでしょうか。「少子化」と「高齢化」，両者のよいところを共に活かすならば，祖父母世代から孫世代への世代継承を可能にする「高齢者と子どもたち」の「出会い」の場を実現できるでしょう。それは，親世代が「育つ」ことをも促すことでしょう。若い教師たちの積極的で創意に満ちた豊かな構想力と計画力と実行力によって，学校をそのような「出会い」実現の場にすることはできないものでしょうか。

そこで，老人も，大人も，子どもも，若者も，みんなが笑顔で，いっしょに楽しく笑えたら，どんなにか素晴らしいことでしょうね。

子どもの道徳

特集」
道徳の授業 ―「子どもの心の高まり」を期待して Ⅱ

87

光文書院